



夢・いっぱい

第3号

令和4年5月25日

2022年度の経営方針
今日の学び合いを楽しみ、明日が待ち遠しい学校づくり
～ 開かれた学校において、「愛宕の子」として地域と共に育てる ～

待つこと

校長 栗林 孝幸

子育てにおいて「待つこと」はとても大切です。すぐに口出しをしたり、手を出したりしてしまうと、自立できないからです。自分のことを自分ですることはもちろんですが、自分で考えて行動することや人を思いやることなど、生きていく上で大切な力が育ちません。それがわかっていても、つつい・・・ということはないでしょうか。親なら誰もが経験し、後悔し、悩み、反省することではないでしょうか。待つことの大切さを教えてくれるお話です。

「そのお宅の最初に生まれた男の子は、高熱を出し、知的障害を起こしてしまいました。次に生まれた弟が二歳の時です。ようやく口がきけるようになったその弟がお兄ちゃんに向かって、こう言いました。「お兄ちゃんなんてバカじゃないか」お母さんは、はっとしました。それだけは言ってほしくない言葉だったからです。そのとき、お母さんは、いったん弟を叱ろうと考えましたが、思い直しました。弟にお兄ちゃんをいたわる気持ちが芽生え、育ってくるまで、長い時間がかかるだろうけど、それまで待ってみよう。その日から、お母さんは弟が兄に向かって言った言葉を自分が耳にした限り毎日克明にノートにつけていきました。

そして、一年たち、二年たち・・・しかし、相変わらず弟は「お兄ちゃんのバカ」としか言いません。お母さんはなんべんも諦めかけ、叱って、無理矢理弟の態度を改めさせようと思いました。しかし、もう少し、もう少し、・・・と、根気よくノートをつけ続けました。

弟が幼稚園に入った年の七夕の日、偶然近所の子どもや親戚の人たちが家に集まりました。人があまりにたくさん来たために興奮したのか、お兄ちゃんがみんなの頭をボカボカとぶちはじめました。みんなは「やめなさい」と言いたかったのですが、そういう子であることを知っていましたから、言い出しかねていました。そのとき、弟が飛び出してきて、お兄ちゃんに向かって言いました。「お兄ちゃん、ぶつならほくだけぶってちょうだい。ほく、痛いって言わないよ」お母さんは長いこと、その言葉を待っていました。その晩、お母さんはノートに書きました。「ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう、・・・」ほとんど無意識のうちに、ノートの終わりのページまでぎっしり「ありがとう」を書き連ねました。人間が本当に感動したときの言葉は、こういうものです。・・・(略)」（『続 気づばりのすすめ』鈴木健二 著）

お母さんがもっと早くに態度を改めさせていたら、もっと早くに弟は兄を馬鹿にすることはなかったかもしれません。しかし、ここにある「お兄ちゃん、ぶつならほくだけぶってちょうだい。ほく・・・。」という言葉は弟からは出てこなかったかもしれません。何年もの間、この弟は家族の兄に対する言動を見聞きし、考えていたに違いありません。

世の中はものすごいスピードで変化しています。思い立ち止まることもなく流れていきます。また、社会全体が、特に仕事においては効率を求め、非効率なことが敬遠されつつあるようにも思います。しかし、一方でキャンプブーム、不便さを楽しんで、自然の中に身を置きます。そんなことを考えると、バランス感覚が必要なのだらうと思います。子どもは自然の中で育ちます。子どもの育ちをほんの少し待つことができると、子どもは自分で立ち上がる力を身につけるようになります。

